

小規模多機能型居宅介護「サービス評価」 総括表

法人名	社会福祉法人 報徳会	代表者	中村裕可子	法人・ 事業所 の特徴	心の中に心を持ち、人に心を運び心を伝え、五つのわ（和、輪、我、笑、話）の調和を図る。 認知症ケアへ根拠に基づいた効果的なアプローチを行い、生活の維持、回復へ繋げ、利用者、家族の想いや生活を紡ぐ支援をする。
事業所名	黒石ケアサポート センター	管理者	中村公生		

出席者	市町村職員	知見を有するもの	地域住民・地域団体	利用者	利用者家族	地域包括支援センター	近隣事業所	事業所職員	その他	合計
	2人	人	1人	人	1人	人	人	人	人	4人

項目	前回の改善計画	前回の改善計画に対する取組み・結果	意見	今回の改善計画
A. 事業所自己評価の確認	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの自己評価での改善点について、優先順位を提示し具体的な評価が見える化することで、取組み、進捗状況の明確化となり職員一人一人の把握へ繋げている。 	<ul style="list-style-type: none"> 事業所内ではサービスの改善点として記録や申し送りのルールを決めや、家族支援について会議や書面にて伝え共有し取り組んだ。地域へのかかわりについては、職員の取り組む姿勢、理解度に個人差が生じてしまうのは現実ある。差をうめる努力は継続し取り組んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> 家族との情報交換が一番大切なことと思うので関係づくりに努めたということは良いことです。 全体を通して自分たちが提供しているサービス内容は評価できるが、事業所として取り組んでいることは”分からない”できない“ように感じる。これも職員間のギャップであり、周知不足だと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> サービス評価の目的・趣旨を説明し、改善計画の取組み・経過を定期的に確認する。D. 地域へ出向いて本人の暮らしを支える取組みについて実践していることを全体が把握できるよう優先して取り組んでいく。
B. 事業所のしつらえ・環境	<ul style="list-style-type: none"> 小規模の玄関先に入ってきた際に落ち着ける昔懐かしい環境設定と利用者様が交流し、「見る」「触れる」空間作りを継続する。 利用者一人一人の生活リズムを理解し、行動、言動、表情から自宅とは違う居場所作りに向けた関わりを図る。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍の中で少しでも季節感を味わい、利用者がくつろげる落ち着いた場所となるよう空間づくりに努めた。又、家族など外部からの訪問者も気持ちよく迎えられよう、玄関先の空間づくりにも努めている。継続し取り組んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> 季節を感じさせる空間づくりがされているのでこれからも続けて欲しい。 居室までは確認できませんが、玄関には飾りを配し共有スペースは広々として開放的な空間が広がっています。職員の知恵と工夫が垣間見えます。 	
C. 事業所と地域のかかわり			<ul style="list-style-type: none"> お互いにできること持ち寄り無理のない範囲で関わり合うことができればよいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルスの影響や動向を見ながら、地域行事等へオンラインでの交流や参加、地域の方を施設に招く機会を検討する。又施設の情報発信を検討する。

<p>D. 地域に出向いて本人の暮らしを支える取組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅サービス、地域の方を支えるため少人数で集える場所を作り家族交流会の開催し出会い、話し合い、寄り添える場、専門的なサポート（情報提供）を行い、本人、家族の関係性の支援へ繋げていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族支援あやとり「わ」の中で、集える場、寄り添える場を開催した。 ・家族への関わりについてアセスメントシートを活用し職員全体で分析した。内容を集約しどのような関わりが必要か一つにまとめ実践している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍ではとても難しい問題でしょう。特別に必要がない限り出向いていくことは難しいと思う。 ・コロナ禍で地域との繋がりを図りにくい状況が続いています。地域の方々を施設に招いたり、交流を図ったりできないならば、職員が外に出向いて情報（写真や動画など）を収集して利用者に伝えたり、住民が集う場に出向いて施設の情報を発信するなど、視点を変えたアプローチを積極的にしてはどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍で積極的に外部へ出向く状況は難しいが、「わ」のカフェ、家族支援あやとり「わ」、認知症サポーター養成講座など定期的に開催している場面で情報発信を継続していく。また、地域との交流として小学校などの行事で ZOOM の活用を検討する。
<p>E. 運営推進会議を活かした取組み</p>			<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍故に地域との繋がりが続いています。推進会議において“地域”の現状や“団体”との繋がりの話題を増やしてもよいのではと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運営推進会議にて、利用者状況の報告等に関連する地域での現状や取組みについての確認、地域へのサービス等情報共有への取組みを図り、地域の把握へ繋げる。
<p>F. 事業所の 防災・災害対策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に安全対策に向けた環境面等の点検を行い防災意識へ繋げる。 ・感染症、災害対策への取組みを運営推進会議で伝えることで互いの情報共有、地域の状況把握へ繋げていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災訓練、コロナ初動訓練を定期的に実践していることで職員が個々に安全や予防への意識が高まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・非常用備蓄食料は、施設内で消費することも良いと思いますが、地域へ還元を図ったり、生活困窮者の支援のために提供したりすることが住民に向けてのアピールになり、災害時の避難場所などとして周知を図ってはいかがでしょうか。 ・コロナ禍が納まりつつある時であればぜひ、訓練に参加したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域交流できる場面や生活困窮者の支援に向け非常用備蓄食料を提供できることを検討する。 ・訓練の様子を写真や動画で発信、外部の方が参加できる場を検討する。